

空



2016・8・9

**SORA** 68号

銀  
漢

柴田 佐知子

いづれ火につつむ身ばかり踊りけり

練る餡のだんだん重し芙蓉の実

働きし骨格のまま生身魂

鶏頭の夜は鉄塊となりにけり

秋風の道それぞれの門に入る

見廻して花野の芯と思ひけり

白露や通ひ婚なら通ひたし

— 『俳句のあるふあ』 八九月号より —

島の田は空につつまれ夏薊

声にせぬオラシヨ幾度も黒穂抜く

密告の貌は尖りて黒葡萄

濡れてゐる夏野の端に乳搾る

善悪の消ゆる泉を汲むときは

遠雷や経典ごとに神ほとけ

もう誰も捕らぬ鯰の大頭

新茶くむ音なき雨につつまれて

涼しくて別の世へ足踏み入るる

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

灯台の中の暗さや半夏生

水かけ祭水外け傘の役立たず

転生の魚かも知れず箱眼鏡

水逃ぐる声や日の濡れ日傘濡れ

瓶底に青空のあるラムネかな

水かけ祭笑ひ笑はれ裾絞る

耳当てて波に慣れゆく浮袋

力士らのひよいと上げたる神輿かな

電球の汚れて戻る烏賊釣船

駆けつけし木場の兄イの麻半纏

大滝に打たれ素直となりにけり

遡る潮に灯の載る祭笛

商ひの算盤太し夏つばめ

水濡れの灯影に映り氷旗

涼しさや折り目正しき服を着て

太陽と遊び疲れしサングラス

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

求愛の薔薇をけふより逆さ吊り

六尺の漢泣かする杉花粉

真白なる心になりて茅の輪出づ

やどかりに放課後の黙きてゐたる

思ふこと溜息となる星今宵

喜びに似て砂をどる泉かな

十葉を煎じ了へたる深眠り

手塩皿つかふ朝や茄子の花

ひややかな猫の足裏や半夏生

青あらし吹きわけここに一里塚

炎昼や弔花りくぞく届きたる

よしきりの近江狭しと鳴きにけり

夜の秋見えざる船の汽笛聞く

青鷺の卵は青し神の島

竹生島

テロテロテロ夾竹桃は血色なる

ややこしき姫の家系図かきつばた

福岡 柴田志津子

滝つぼを出て現世の人となる

蠓蠓の群れて明日はきつと雨

たつぷりと齡いただき葛桜

本音などなかなか言へず藺座蒲団

ゆつくりとこの世見てゐる昼寝醒め

夏風邪の子が触りたき聴診器

南天の花に雨ふる外厠

老人に次の夢あり桐の花

福岡 岸 洋子

神籬に雨の匂ひや夏祭

氏神の茅の輪ひとすぢ頂けり

斯くばかり長き戦後や蠓の昼

敗戦のいろなり夾竹桃の赤

さよならを言へぬなりゆきかき氷

うれしさはすぐ声に出て合歡の花

寝つかれぬ大き枕や河鹿笛

水輪生るとんぼうの尾の触れしとき

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

神苑の歩み新樹の冷えまとふ

ほととぎす樟は神鈴加へつつ

青葉木菟棲みたる森の肺活量

地に降りる闇やあを栗匂ふ

毛虫焼きし数ほどの星その夜出る

水上がるとき蛇つよく撓りたる

水の辺の夕映ながし落し文

草矢打つどれも思ひに届かざる

どくだみの花をさみしと思はずや

草笛の音を競ひしよりの友

来し方は光となりしなめくじり

みな貌を正面に向け蟻の列

軒先に軍手と野良着明易し

日盛りや墓のうしろに人のこゑ

まつすぐに来て直角に夏つばめ

遠山に帰る雲あり海酸漿

千葉 原 友 子

すこやかな日の出日の入り茄子の花  
鳶の目を間近に見たる芒種かな  
芋植うる子を待まねば気の張りて  
時の日の初めの音や朝刊来  
梅雨明やむかしは世話の焼けし道

粕屋 秋 千 晴

笛の音の闇を開きし薪能  
序の舞や影を小さく薪能  
中之舞影が交はる薪能  
早舞の影が先行く薪能  
薪能影を従へ化身引く

粕屋 吉 田 穂

ヴィーナスの背中は広し青葡萄  
滴りの音常闇を穿ちをり  
はんざきは何を待ちしか忘れたる  
駆落のあとの日常夾竹桃  
しやらしやらと蛇の殻鳴る女人堂

福岡 矢野 百合子

追ひ山笠やまを待つ桶の水震へをり  
清道旗はたきに渦まく博多山笠  
畦走る植田水には追ひつけず  
緑陰に入りて真顔となりにけり  
仲直りしたるどの子も顔涼し



宮崎 田代民子

伊藤通明先生初盆

玄海をひと跳びに来よ瓜の馬

初蠟のあとしばらくは雨の日々

菩提寺は美男の家系夏ねぶつ

水かけ地藏炎暑の街を練り歩く

蠟の木となる菩提寺の大銀杏

糸島 小林朱夏

蓮の飯女ばかりが残りたる

故郷や縁より上がる盆の僧

躍りの輪入りなかなか抜けられず

牛小屋の臭の混じる野分かな

次の世も友でありたし草の花

福岡 あさなが捷

葉桜や急に幕引く村芝居

樟若葉背を正し入る奥の院

気づくまで待つことにするソーダ水

目を凝らし蟻の進入口探す

何事もうべなふ母の端居かな

糸田 宮井知英

蓮の葉の露定まらず零れけり

葉脈の脈打つてゐる蓮かな

沙羅の花散る時光放ちけり

山裾のとつぷり漬る植田かな

田植機を洗ひ早苗饗始まりぬ

福岡 亀井紀子

まつすぐに駆けてゆきたる素足の子

一滴の血の鑑識や誘蛾灯

遙拝の島は未踏や晩夏光

住職も男なりけり白上布

水盤の水のさ揺れや盆の入り

福岡 山内碧

腕組んで女を阻む山笠法被

荒梅雨や綾杉黒き竜と化す

夏草のそこだけ刈られ崩御の碑

濡れてゐる山を揺さぶる大南風

子も友もだんだん遠し夕端居

大阪 田岡千章

余生てふ遊びの時を更衣

老斑を徽章としたり更衣

聖五月剃りあと青き整体師

筍を茄でて一戸を匂はする

校櫛の昼は閉ざされ花水木

京都 天谷翔子

御柱曳けよ曳けよと夏燕

幾万の祈りの手美し御柱祭

今年また干す父と子の祭足袋

息継ぎの唇うすき祭笛

化粧はれし男の子揺らして祭馬

長崎 松尾龍之介

高圧線の跨ぎゆく麦の秋

東西に尾根南北にほととぎす

上人も流人も越えし青領かな

半夏生あとから気づくことばかり

鮎食べて五体のどこか透き通る

須恵 苑 実 耶

川魚の影の往き交ふ青楓

風の間となれり葭簀を立てかけて

すててこや失ふものは何もなし

行水の子に傘の影作りやる

青葉の夜魔女の声音で読み聞かす

福岡 永 淵 恵 子

大宰府 山 本 則 男

そのかみの三山の恋したたれり

飛鳥大仏拝さるるたび古りて夏

刎ね上がる入鹿の首に紙魚走る

声明に似て首塚の雨蛙

涼しくて声響かする石舞台

牛蛙闇を重たくしたりけり

心太突けばすまして出で来たる

かたつむり自問自答は殻の中

ほんたうのことが映りぬ金魚玉

大阿蘇は大きな器喜雨来たる

飛鳥五句

多武峰縁起絵巻

岡垣 田中とし江

天水田まじる棚田の田植かな  
麦秋や抓んでみたき空一枚  
松蠟や音又となりて停ちつくす  
松蠟のきらきら雨に鎮もれる  
百日の願掛け静か青葉木菟

福岡 白水良子

忘れられ気ままに母の日を過す  
一步引く力まだあり聖五月  
茹小豆夫の居ぬ間の幸よ  
十葉の売家の札の埋りけり  
子子の甕を返して寺領なり

福岡 田代貞香

言霊に鬼も仏も葛の花  
桃の香の更に仏間の灯の消えて  
青すだれ終日人と逢はずある  
おほかたは記憶うすれし振れ花  
あやしても赤子不機嫌夏夕べ

福岡 栗原京子

神鏡に鋭き光夏来たる  
陵王の仮面爛爛飾り山笠  
遠花火ベンチに母を座らせて  
風鈴や訪ふ人のなき木賃宿  
田を植ゑて峰の稜線あらはるる

東京 今井 春生

頭を穴に入れしくちなは跨ぎけり  
山の藤襲ひかからんばかりなり  
六月の見ゆるかぎりの榦林  
旅路より帰ればバラの家となり  
祭太鼓鳴るや野生の目覚めたる

熊本 松田 明子

なみの間に新茶一杯いただきぬ  
闇に耐へ揺れに耐へたる卯月かな  
一村を包みて余る蠟しぐれ  
草むらに脱ぎつ放しの蛇の衣  
歓声の混みあふ浅瀬夏休み

福岡 樋口みのぶ

雨戸くる朝顔の数思ひつつ  
鍬の汗そのままに立つ厨かな  
真実をかくして語る羽蟻の夜  
固まりて炎となりぬ花カンナ  
雑兵は命投げ出す草の花

山梨 野畑さゆり

早発ちの旅の朝餉や河鹿鳴く  
郭公の声のびやかや津軽富士  
リハビリの杖の伸縮ほととぎす  
遠郭公聖堂の窓開け放つ  
土蔵のみ残る生家や半夏生